論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第８条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

| | | | |
|---|---|---|---|
| フリガナ<br>氏名（姓、名） | ミヤシタ　タイヨウ<br>宮下　太陽 | | 授与番号　甲 1658 号 |
| 学 位 の 種 類 | 博士(　心理学　) | 授与年月日 | 2023 年　3 月　31 日 |
| 学位授与の要件 | 本学学位規程第 18 条第１項該当者　　[学位規則第４条第１項] | | |
| 博士論文の題名 | 質的研究法 TEA の新たな理論的展開とキャリア領域における実装可能性 | | |
| 審　査　委　員 | （主査）サトウ　タツヤ<br>（立命館大学総合心理学部教授） | 森岡　正芳<br>（立命館大学総合心理学部教授） | |
| | 田島　充士<br>（東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授） | | |

論文内容の要旨

【論文の構成】

本論文は、第１部理論編、第２部実践編、第３部総合考察の３部構成であり、全７章からなる。第１部理論編は第１章「TEA（複線径路等至性アプローチ）における記号概念の考察」、第２章「TEM（複線径路等至性モデリング）の新たな理論的展開」、第３章「TLMG（発生の三層モデル）の新たな理論的展開」の３章からなり、質的研究法 TEA の理論的発展が目指されている。第２部実践編は、第４章「プロとしてキャリア転換する径路を描く―統合 TEM―」、第５章「キャリア転換における価値変容を捉える―統合 TLMG―」、第６章「TEA を用いたキャリアの縦断的研究―個人 TEM―」の３章からなり、キャリア領域での社会実装における TEA の展開可能性が追求されている。第３部の第７章「総合考察」では、それまでの議論を踏まえ、TEA の理論的発展および社会実装の発展可能性について総合的な考察を行い、その到達点と限界ならびに課題についてまとめている。

【論文内容の要旨】

本論文では、①記号論的文化心理学に立脚した質的研究法 TEA の理論的発展を図ること、②TEA の社会実装における発展可能性を追求することを目的とした。第１章では、TEA において記号をどのように概念化すれば TEA がより豊かになるかという視点から、記号の三角錐を記号概念の基本単位として提示した。第２章では、TEM における記号概念の精緻化を目指し、必須通過点が分岐点に変容するポイントについて焦点をあて TEM のイマジネーションモデルを提示した。第３章では、TLMG の分析手法の発展可能性を念頭に、インタビューデータの中動態的な揺れ動きに着目することの重要性を示した。第４章と第５章では、プロとしてキャリア転換した経験を持つ８名の方を研究協力者とし、個人のキャリアの多様化に焦点をあてた分析を行った。第４章では「プロとしてキャリア転換する」等至点に至る径路には大きく４つの段階があることを示し、第５章では分岐ゾーン（BFZ）のトリガーとなる発生の促進的記号とそこでのせめぎ合いに焦点をあてることで、インタビュー協力者の語りの揺れ動きを捉え、中動態的な状況に着目することの重要性を示した。第６章では、１名の研究協力者を対象に縦断的研究を行い、未来展望を基点に時間展望を切り口としてインタビューを行うことの有用性を示した。第７章では人生 100 年時代において一定のキャリアを積んだ社員と組織が行う面接において有効なスキームの提案がなされた。

| | |
|---|---|
| 論文審査の結果の要旨 | 【論文の特徴】<br>理論面においては、パース、ヴィゴーツキー、ヴァルシナーの記号概念をレビューした上で、記号論的文化心理学に立脚した方法論である TEA における記号の重要性を掘り下げている点が特徴である。また実践面においては、既に一定のキャリアを構築しつつ転職を行った人を対象にした面接調査を行っており、シンクタンク・コンサルティング企業において人事・組織の実務に携わってきた学位申請者だからこその実務経験に基づく問題意識が活かされていることが特徴である。第 1 部理論編では、記号概念を丁寧に掘り下げることに加え、 TEA とイマジネーション理論の接合や、記号圏というフィルターを通して見えてくる中動態的な揺れ動きへの着目などにより、分析手法として TEA を理論的に発展させる提案を行った。これにより、記号と人との相互調整過程を文化として捉える記号論的文化心理学の方法としての TEA の可能性をより明確にした。実践面では、社会人のキャリア領域における先行諸研究をレビューした上で、量的な方法論による先行研究の到達点を踏まえた上で、質的な方法論である TEA を用いることの意義が分かりやすく示されていた。特に第 6 章では、TEA を縦断的研究の方法として捉えて複数の時点における TEM を作成した。これにより、過去の深い経験づけに起因する諸力が未来展望や分岐点における行動選択に影響を及ぼすということを明確にしえた。これはキャリアの経年的変化に焦点をあてた質的研究を行うことの重要性を示すものである。<br>【論文の評価】<br>公聴会では、学位申請者による論文要旨の説明の後、審査委員が学位申請者に対する口頭試問を行った。審査委員からは、記号概念についての学説的な解読は労作であり適切だという指摘に加え、TEA における分岐点を分岐ゾーンとして時間幅を拡張して概念化したことがキャリア研究にとって有効であると評価された。そのうえで、審査委員から記号が力をもつということの含意が曖昧ではないかという疑問が呈された。宮下氏は、記号が力を持つとは、記号の解釈項が主体に対して作用している状態であり、解釈項として機能しているということであると回答した。また、分岐点における選択肢発生における情動の働きが軽視されているのではないかという疑問が呈された。宮下氏は、ヴァルシナーの内化／外化の層モデルについて言及し、層Ⅲにまで達するような深い経験づけを伴う出来事があった際に情動が働くと回答した。また、その具体的な例として第 6 章で取り上げた想起される諸力をあげた。これらの回答はいずれも適切な応答だと評価された。<br>本論文は、質的研究法 TEA における記号概念を理論的に発展させたこと、社会人のキャリア転換という人生 100 年時代における重要な社会的課題に TEA を実装してキャリア転換のモデルを示したこと、さらに企業におけるキャリアコンサルテーション実践に対してその有用性を提案したこと、において大いに評価できる。<br>以上により、審査委員会は一致して、本論文は本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しいものと判断した。 |
| 試験または学力確認の結果の要旨 | 本論文の公聴会は 2023 年 1 月 14 日（土）18:30～20:00、立命館大学大阪いばらきキャンパス B 棟 275 教室（及びコロナ感染状況を勘案して ZOOM によるオンライン会議方式）で行われた。<br>副査の田島氏は職務上の要請からオンライン参加となった。<br>審査委員会は、論文審査を中心に本学大学院人間科学研究科博士課程後期課程の在学期間中における学位申請者の学会発表など様々な研究活動、また公聴会の質疑応答を通して、博士学位にふさわしい能力を有することを確認した。<br>なお本論文に関わり、学位申請者は『立命館人間科学研究』に査読付き論文「TEA（複線径路等至性アプローチ）における記号概念の考察」など 2 編を掲載しており、博士論文提出要件を満たしていることを確認した。<br>以上より本学学位規定第 18 条第 1 項に基づいて、学位申請者に博士（心理学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。 |